

宝乗院の愛染明王

星宮公民館長 石川 一夫

下川上地区にある宝乗院愛染堂には、愛染明王が祀られています。

平安時代の初めごろ、大同元年（806）九月に、この地域が洪水におそわれましたが、水が引いた後の河原に一体の仏像が流れ着いていました。村人たちはこの仏像をひろい上げ、河原に小さな堂を建てて安置しました。

村人たちは名も知らぬまま、村の鎮守として護り続けていると、京都からやって来た僧がこの仏を見て、これは一木三体の愛染明王であると教えてくれたそうです。

一木三体の像というのは、一本の木（クスの木）から造り出された三体の仏像のことで、愛染堂に安置された明王像以外の二体は、陸奥国と筑紫国にあると言われています。

寺の言い伝えによると、享保六年（1721）十月十一日に入仏式を行い、現在に至っています。戦後、地区民の浄財により現在のかわらぶきとなりましたが、建物の老朽化が激しく雨漏りがひどくなったため、明王様は現在、自治会館に安置してあります。

栗原保夫先生が作詞してくれた「愛染しぐれ」という歌の一節を紹介します。

人に幸せ贈ってくれる
わが身のことには構わない
これが仏のみ心でしょう
屋根が大きく
こわれています
傘を持たない愛染様に
秋の冷たい
秋の冷たい 雨が降る

この度、皆様のご協力により、ようやく改築の目処がたちました。

愛染様ととうもろこし

下川上地区では今でも、ほとんどの農家で、とうもろこしを栽培しません。

その理由は、大昔に、江南の文殊様と愛染様が闘いをしたそうです。

闘いに敗れたのは愛染様で、負けて逃げる途中、とうもろこしの葉で目を痛めてしまったそうです。

愛染様の虫封じ

かぞえ四歳になったら愛染様で虫封じは、村内はもちろん、近隣でも有名な行事です。

子どもが四歳くらいになると、夜泣きをしたり、引きつけを起こしたり、原因不明の発熱などよくあることですが、昔から「カンの虫」が起きたとか言われます。

愛染様の縁日である一月二十六日には、寒風の中、朝早くから、子どもを背負って、親たちが遠方から集い、住職に手の平に梵字を筆書きしてもらい、「虫」を封じる祈祷を行っています。

医学の進歩した昨今でも、子どもの成長を願う親心は今も昔も変わらず尊いものです。



(熊谷市公連だより 第20号 平成27年より)